

日本、スウェーデン、スイスにおける働き方の文化の違い



佐藤香枝

日本女子大学理学部物質生物科学科
[112-8681] 東京都文京区目白台2-8-1
教授, 博士(農学).
専門は生物分析化学, microTAS.
satouk@fc.jwu.ac.jp
<http://mcm-www.jwu.ac.jp/~kaesato/>

私は大学院を修了してから20年以上ずっと共働きです。夫は家事ができるので、私は仕事に没頭し、このコロナウイルスの感染拡大以前、無理を重ねるような働き方でした。今でも、自分自身には、私のようなノンビリ型がマイペースでやっていたりは一般社会人の仕事量に追いつかないと言い聞かせ働いています。自分自身がギリギリなこともあり、以前は、政府が注力する女性の社会進出の目標値を達成するのはとても難しいことだと思っていました。今、私が教えている女子学生達が、私のように生活の多くを仕事に費やすような、そんな将来を望んでいるようには見えなかったのです。しかし、男女ともが激務をこなす将来ではなく、男女が平等にゆったりと社会にかかわる世界をスウェーデンで知ることができました。

2018年度に海外研修で、スウェーデンのストックホルムにある Science for Life Laboratory に4カ月半、スイスのチューリッヒにあるスイス連邦工科大学チューリッヒ校 (ETH) に7カ月半滞在しました。初めて海外で働く機会を得て、男女の働き方の国による違いを知りました。

スウェーデンで滞在した Mats Nilsson 教授の研究室は、構成員は博士課程の学生と研究員で20名ほど、国籍はさまざま、学生も研究員も男女比は半々でした。スウェーデンは女性の就労率が高く、子育てと仕事が両立できる社会です。博士課程の学生で子どもがいるのも普通でした。スウェーデンは社会福祉制度が整っていることで有名です。小学校では鉛筆1本から必要なものはすべて学校で用意してくれるので、親が準備する必要はありません。家事や子育てに男女差はなく、男女ともに勤務時間は短いです。従来から在宅勤務の日も多く、日本よりも勤務体制に自由度が高い印象を受けました。だれもがゆったり働くことができる世の中なら、スーパーウーマンでなくても、共働きできると思いました。

ではスウェーデンのような世界でどうして仕事が回っていくのかというと、実験室の中では回っていないこともありましたが、片付けをせずに帰る人もいますし、必

要な物品のストックが途絶えることもあります。みんなが共働きでライフワークバランスが取れるような世界では、男女ともに仕事量が少なくなり、快適な仕事環境を整えるのが難しくなることを知りました。Nilsson 研ではオーバーワークにならないようにという話はあっても、無理に仕事をやらせるという場面はありませんでした。そのために多少の不自由があっても仕方がないのです。一方、ラボのメンバーで、プライベートよりも仕事に重きを置く文化の中で育った人達もいました。優秀な教授は、私生活より仕事を優先して取り組む多国籍なメンバーを揃えていたのです。ゆったりとしたスウェーデンライフの中でラボを回すためには、仕事をしたい人の負荷が高い体制?になることが必要なのです。

次に滞在したスイスでは、働く女性の環境はスウェーデンと異なっていました。Viola Vogel 教授の研究室の構成員も20名程度でした。女子学生は多かったのですが、博士研究員に女性はいませんでした。聞くところによると、スイスは、子どもは学校でお昼を食べる制度がなく、昼休みに一度家に帰るそうです。親は家にいることが前提になります。働く人にとってこれは大きな負担です。Viola 先生はお子さんが小さかったころ、自分の代わりに家に居てくれるベビーシッターを雇っていたそうです。そのような環境では、スウェーデンのように夫婦ともに共働きというのは厳しそうです。別の研究室の女性研究員からも子どものために一時期は専業主婦をしたという話を聞きました。

スイスでは男女間の賃金格差が問題となっています。それをテーマにした討論会が大学で開催され、女子学生が活発に発言をしているのに驚きました。日本はスイスより格差がありますが、スイスほど問題意識が高くありません。日本が今後、夫婦共働きがスタンダードな世の中になっていくなら、今のように高いレベルで仕事をこなす社会から、男女の格差を減らし、多少不自由になっても、だれもが無理なく働ける社会へ移行しなければいけないのだろうと最近では考えています。